

September 2020

京都大学総合博物館 ニュースレター



展示ケースからの展示場（2頁に関連記事）

特別展「iPS 細胞研究所設立 10 周年記念展示」.....	2
新型コロナウイルス感染拡大防止対策を講じた再開館までの経緯について	3
パリ自然史博物館で科学イラストレーションの武者修行.....	4
研究資源アーカイブ通信〈19〉	
京都大学研究資源アーカイブの新しいウェブサイト	6
新任スタッフの紹介	8
総合博物館日誌（2020 年 3 月～ 6 月）.....	8

2020 年度 特別展

iPS 細胞研究所設立 10 周年記念展示

京都大学総合博物館特別展として 2020 年 4 月 8 日に開会を迎える予定だった京都大学 iPS 細胞研究所 (CiRA = サイラ) 設立 10 周年記念展示が本稿執筆時点 (2020 年 5 月 20 日現在) で開催できずにいる。2019 年末より世界で爆発的感染を引き起こした新型コロナウイルスの感染防止にともなう休館措置が継続しているためだ。

本企画展は、ノーベル医学生理学賞受賞の山中伸弥教授のグループが世界に先駆けて開発に成功した iPS 細胞を使って新たな治療法を送り出し、まだ見ぬ生命の謎を解き明かす iPS 細胞研究所の開所 10 周年を記念して企画された。副題の「こだわりの研究所を大解剖」は、山中所長が細部までこだわりぬいた空間・組織の詳細を展示で紹介したいと考えたからである。設立からの 10 年間で、研究所は当初の 150 名から現在の 600 名規模へと大きく成長し、特許の専門家やサイエンスイラストレーターなど多様な研究支援者が多数所属し、世界最先端の研究環境を支えている。この研究所に対する期待の大きさは想像に難くないが、研究者だけでなく、患者さん、政府、企業、市民による多くの支援に対する感謝から、来館者を想定するときにも車椅子ユーザーなど多様な来館者にとっての鑑賞のしやすさに配慮して展示手法を検討した。

ノーベル賞メダルのレプリカはもちろん、細胞培養に必要なピペットやクリーンベンチなど基礎研究を支える実験機器など研究プロセスを想像できるように展示環境が構成されている。展示チームが特に注力したのは、CiRA で行われている研究が基礎から応用まで多岐にわたり、また研究者が力を発揮できる環境を整えるために、

実験機器の管理、特許、寄付募集をはじめ多様な専門家に支えられていることを来館者に知ってもらうことである。展示場には体験と共有を重視して、CiRA で使われている実験用具やオリジナル白衣なども近くで鑑賞したり、CiRA が開発した独自の教材を体験できるように工夫した。車椅子ユーザーの方も iPS 細胞を顕微鏡でのぞけるように、展示台の足元を工夫するなど体験型展示を多用したが、今回の新型コロナウイルスとは結果として相性が悪く、感染防止の観点からは今後休館措置が解除されたとしてもしばらく体験していただくことは難しいと判断せざるを得ない。もちろん今回の休館措置に突入したのが、ほとんど展示が完成しつつあった時期と重なるため、顕微鏡画像はバイパスして iPad で表示するなど対応を試みたが、電子機器の共用も避ける必要があるなど、タッチ操作なども避けたオートプレイに変更するなどした。2020 年 5 月 20 日現在、展示チームとしてはオンラインツアーなど現在のデジタル技術を駆使したバーチャル展示鑑賞について様々に検討している。すでに 360 度カメラによる展示室紹介や、ふだんは鑑賞できない展示ケースの中から展示空間を紹介するなど、オンラインだからこそできる新たな展示表現を模索している。

すでに遠隔会議システムの Zoom を使った展示ガイド中継を試みるなど、オンラインによる配信を試行しており、この状況を機に新たな展示技法による紹介を数多く試みたいと考えている。京都大学総合博物館 HP ならびに Facebook より紹介していく予定であるので、ぜひご覧いただきたい。

(総合博物館 准教授 塩瀬隆之)

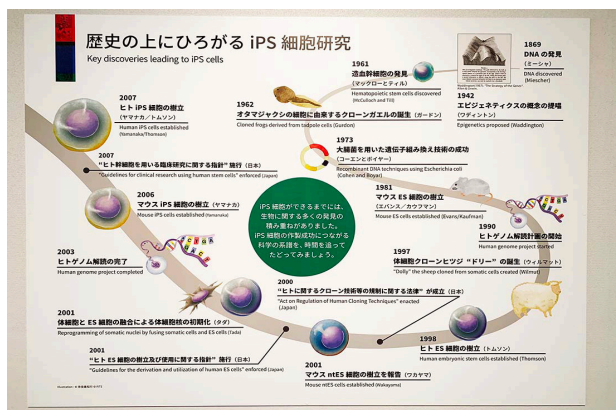


図1: iPS 細胞研究の歴史



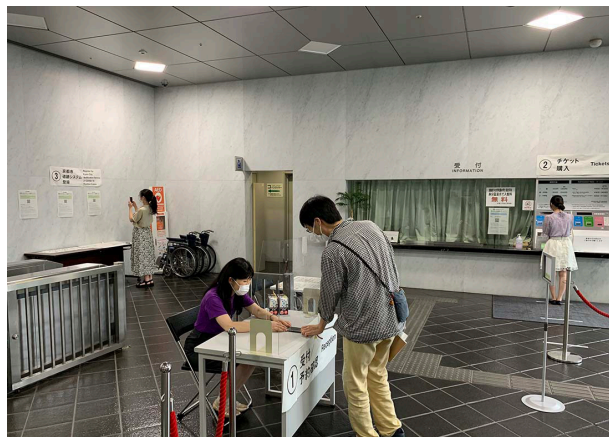
図2: 白衣体験と実験室再現

新型コロナウイルス感染拡大防止対策を講じた 再開館までの経緯について

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、総合博物館は2月29日より臨時休館をしてきた。当初、春休み期間中あるいは新学期始めにも再開予定を見込んでいたが、4月7日に発表された7都府県の緊急事態宣言（京都府は含まれなかったが近隣の大阪、兵庫が指定）、さらには4月16日に13都府県に拡大した特定警戒都道府県に京都が含まれたことを踏まえ、臨時休館は5月4日まで延長された（後に5月25日まで再延長）。5月25日、全国の非常事態宣言が解除され、一部小中高の再開や博物館が再開の動きを見せる中で、大学機関の全面解除には至らなかった。これは大学生の活動範囲の大きさ、実家から下宿への移動、オンライン授業がスタートして1～2か月が経過してペースができていたというタイミングも含めて、多くの大学で緊急レベルは維持された。大学博物館は、大学内の一機関であり、当然ながら同水準に従って休館延長の決断をした。

しかし、大学総合博物館では一般公開のほか、標本や資料の研究や教育利用の支援も重要な役割となる。5月まで非常事態宣言下で停止していた資料閲覧についても、6月からは感染拡大防止に留意しながら、感染拡大防止対策に同意いただける研究者の協力のもと業務を再開した。館の教員をあげて担当している学芸員養成課程科目については、前期は全学的な指針に沿ってオンライン授業での対応となったが、現場での活動を重んじる博物館実習については、学生の対面授業一部解禁のタイミングを待ち、感染拡大防止対策を徹底したうえで、8月31日～9月4日（一部オンライン）に対面実習を実現した。

この間、博物館内では常に再開のタイミングを見据え、館内での新型コロナ感染対策ガイドラインおよび再開マニュアルづくりを並行して進めていた。オンラインによる完全予約制の導入、時間あたりの入館者数制限などである。予約に際しては氏名および連絡先を要請することで、同時帯の来館者を完全把握することに努めた。入館に際しては、マスクの着用や手指消毒、非接触型体温計による検温への協力も要請した。京都市新型コロナあんしん追跡サービスの来館者登録も呼びかけた。ハンズオン資料やタッチパネル、ガラスケースを介した感染予防のため、当面の使用禁止を明示し、消毒時間確保のため開館時間の短縮運営とした。消毒に際しては、ガラス



感染拡大防止対策を施した受付を取材する館実習の学生

ケースのほかにアルコール消毒に不向きなアクリルケースなどが混在するため、スタッフへの消毒マニュアルおよび指導を徹底した。

2020年9月5日（土）、半年間の休館を経て京都大学総合博物館は再開した。1週間という短い告知期間にも関わらず、初日から上限ギリギリの来館者に恵まれ、大きな声を出せない静かな観賞ではあるが日常を少し取り戻せたようで感慨深い初日となった。準備をしたまま目の見なかった特別展については、臨時休館中にもYouTube LiveやZoom展示中継などオンライン配信を駆使した新たな展示体験の提供などの工夫を試みたが、再開当日に直接に来館者の笑顔にふれるとその挑戦もまた霞んでしまう。未曾有の出来事への戸惑いは隠せなかったが、標本や資料で研究する研究者や学生、一般観覧する来館者から期待される機能を、より継続的に果たし続けるためにもより強固な博物館体制の確立が急務である。

（総合博物館 准教授 塩瀬隆之）

総合博物館の開館状況およびオンラインによる入館予約については、ホームページをご覧ください。

<http://www.museum.kyoto-u.ac.jp>

学生の活動報告

パリ自然史博物館で科学イラストレーションの武者修行

総合博物館が収蔵する標本資料は学術研究に活用されるとともに、京都大学の学部生の教育にも広く活用されています。総合博物館での自然史標本との出会いをきっかけに科学イラストレーションに興味をもつようになり、挑戦を続ける京都大学総合人間学部の中田花音さんによるヨーロッパの自然史博物館での活動報告を掲載します。

私は本学のおもしろチャレンジという奨学金プログラムを利用してパリ自然史博物館で科学イラストレーターのインターンに参加した(図1)。この職業を知ったのは2回生の時の授業だった。生物を精彩に描き特徴をイラストで表現する。科学系の本に載っているイラストや論文で使用されているイラストもそうだ。画力だけではなく、対象の生物に関する知識なども要求される科学イラストに私は強く惹かれた。

そして紹介されたパリのイラストレーターの方と連絡を取るうちに知ったのが、このインターンシップであった。2020年2月末から1ヶ月の予定であったが、新型コロナウイルスの影響で予定より2週間切り上げて帰国した。しかしパリ自然史博物館という世界的に有名な博物館で専門家からイラストレーションを学べたことは貴重な経験であった。以下にインターン中に出された課題のうちの1つを紹介する。



図1: パリ自然史博物館

博物館の担当者は私にトリアドバトラス *Triadobatrachus massinoti* という、最も古いカエルの祖先と言われる絶滅両生類の化石のレプリカを用意してくれた。まずはこのレプリカを手がかりに、本物の化石を博物館内の古生物学のギャラリーから見つけることから始まった(図2左)。その後はレプリカを元に長さなども書き入れた骨のスケッチを完成させた(図2右)。

次に博物館で働いている古生物学者に、トリアドバトラスがどういう形態をしていたかについてインタビューを行った。そして生きていた当時の姿を想像してイラストで再現した(図3)。スケッチした脊椎の数が化石より1つ少なかったり描き終える前に帰国しなければならなかったりとミスやトラブルはあったが、私にとって貴重な経験となった。

カエルは幼生にしか尻尾がなく、だからこそ無尾目(カエル目)とよばれる。しかしトリアドバトラスは無尾目でありながら変態後も太ももの半分くらいの長さの尻尾がついている。尾を持つ他の原始的な両生類と現生の無尾目であるカエルとの間の中間的な特徴を持っている種であるため、両生類の進化の過程を知る上で重要な生物であることがよく理解できた。皮膚の模様や色、後肢の水かきの有無は情報がなかったため、日本のヒキガエルを参考に自分でアレンジした。このトリアドバトラスのように、化石は普通、生時の特徴を残していない。

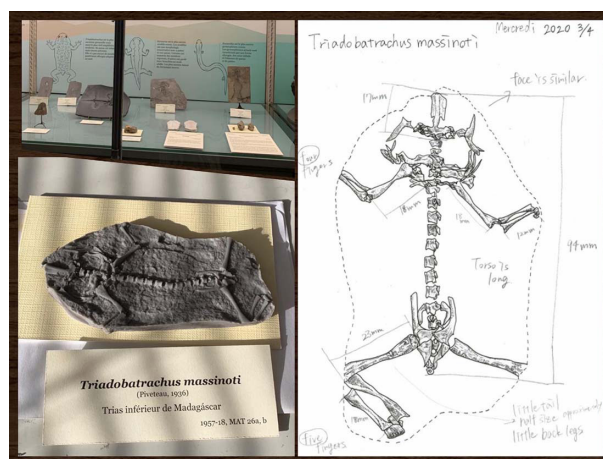


図2: トリアドバトラスの化石のレプリカ(左), その骨格のスケッチ(右)

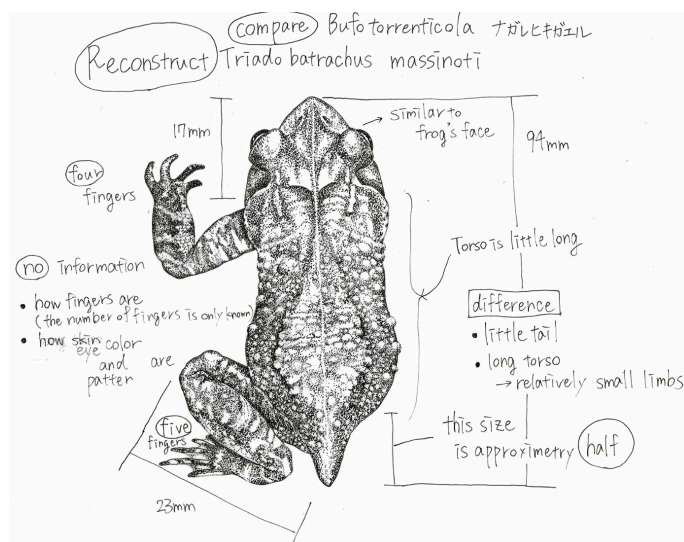


図3：トリアドバトラクスの想像図

その場合にイラストで表現できる科学イラストレーターが必要なのだ。身をもって科学イラストレーターの意味を学ぶことができワクワクした。

このトリアドバトラクス以外にも、ハイエナの頭蓋骨やマリモのスケッチ、Adobe Photoshop を用いた簡単な作品の制作を行った。パリ自然史博物館内には植物園や動物園、東京国立博物館内の展示デザインのもととなった進化のギャラリーなど多くの施設がある。また少し離れたところには人間の歴史を展示した博物館もある。パリ滞在中はたくさんの施設を無料で巡らせてもらいラフスケッチもした。

インターン先のスタジオでは9ヶ月の長期インターンで来ているアメリカ人のプロのイラストレーターがいた。英語はもちろんフランス語も堪能なので、たくさん助けていただき一緒に博物館巡りもした。彼は展示物だけではなく周りを歩いている人物のスケッチも行っていた。短い時間に対象を捉える練習を常に行う積極的な姿勢に感動した。

博物館では展示物を見るので一杯一杯だったが、京都に帰ってから動いている対象を捉える練習をしてみた。具体的には京都市動物園で動く動物のスケッチをした。また卒論対象であるナガレヒキガエルを飼育ケースに入れて、動き回るヒキガエルの形をスケッチしたり、標本にした場合の体の形や皮膚の模様の位置をイメージして描いたりした。今まで動く生体を見て描いたことはほとんどなく、写真をじっと見つめて描くことが多かった。新鮮であり難しかった。科学イラストレーションに精通するためには、動く生体を的確にスケッチできる必要があり、自分にとって、大きな壁である。しかし乗り越えることで、また新しい世界が見えてくると思う。

また博物館では地下収蔵庫を案内していただいた。写

真を撮るのは自由だが絶対にその写真を第三者と共有してはならない。収蔵庫には猫や鳥などの哺乳類からサメやマンボウなどの魚類まで様々な動物が保管されていた。京都大学の総合博物館の地下収蔵庫とは比べ物にならないほど広く、多くの種類の標本があった。その中にはもちろんエタノール液浸の両生類や爬虫類の標本もあった。博物館の方によると以前まではガラス製の容器でエタノール標本を保管するのが普通であったが最近は不透明のプラスチック製の容器が安いため用いているという。しかし展示する上ではガラス製の方が容器の中を見ることができ、また見た目も美しく良いと言われている。博物館としてはそこに葛藤があるらしい。もっと昔に遡るとガラス製の容器の蓋がガラスやプラスチックではなく鉛の時代もあったそうで実際に見せていただけた。博物館での保管方法のこだわりや事情を聞くことができ非常に楽しかった。

博物館は科学イラストレーターと密接に関わっている。日本ではほとんどなくなってしまったが、海外ではパリ自然史博物館のように専属のイラストレーターを雇用していることも多い。博物館について学ぶことや学芸員の事情を知ること科学イラストレーターにとって重要だと分かった。

私はこれから科学イラストレーションに関わる仕事に就きたいと思っている。パリ自然史博物館の方は「このインターンは君にとってのスタートだ」と言ってくれた。その言葉が今でも心に残っている。パリで出会った方々の協力もあって今後はオンラインのイラストのスクールにも通う予定だ。自分が強く惹かれた科学イラストレーションにこれからもとことん向き合い続けたい。

(総合人間学部 4 回生 田中花音)

研究資源アーカイブ通信〈19〉

京都大学研究資源アーカイブの新しいウェブサイト
米国の記述標準から紐解くリニューアルの要点

京都大学研究資源アーカイブ（以下 KURRA）のウェブサイトが 2020 年 4 月にリニューアルした [図 1] *¹。表向きの説明では、利用に関して「利用方法」と「利用実績」との新設を強調したが、今回の目的は、混沌としたウェブサイト全体を再構成することにもあった。検討過程でアーカイブズ学の研究者として考えたことを、以下に記しておく。

再構成の考え方——記述標準を参照して

KURRA のウェブサイトは、大きく分けて、事業案内と資料情報との二つで構成される。前者は、事業の目的や沿革等で、リニューアル前の時点で内容に不足がなかったため、情報の整理と統合で済んだ。後者は、新設した「利用方法」「利用実績」と関連しながらも、これまでに公開してきた資料群（27 件）の概要が中心となる。そのため、概要情報の提供方法を再考することから始めた。

まず、KURRA の資料概要とアーカイブズ一般の記述標準との項目を比較した [表 1]。ここでは米国の記述標準 DACS を参照した *²。DACs は、2005 年に米国アーキビスト協会が米国のアーカイブズ・コミュニティの公式標準として採用した記述ルールで、それまで 20 年以上にわたって用いられてきた標準 APPM（Archives, Personal Papers, and Manuscripts）の後継にあたる。これまで KURRA は、なんらかの記述標準を参照しているようではあったが、参照元は明示されてこなかった。標準との関係がわかれば、アーキビストなら誰もが一貫した方法で資料情報を記述できる。そのうえ標準化したデータを他のデータベースへ提供すれば、資料の利用促進ともなる。米国の助成団体は *³、利用促進の一環で、

DACS のような標準を用いて資料内容を記述して、さらに EAD や MARC の記述標準で構造化することを助成条件にしており *⁴、KURRA のねらいも同様である。

DACs と KURRA ウェブサイトとの関係

DACS の全 25 項目を表 1 の左側に列挙した。1 の「記述レベル」では、●を「最小限数の項目 minimum number」、●△を「最適数の項目 optimum number」、それ以外を含めた場合を「付加価値を与える provide added value for researcher」と説明している。つまり、●は必須で、△は任意の度合いを示す。記述対象が「単階層 Single-level」と「多階層 Multilevel」とで、その重要度は若干異なるが、ここでは資料群の概要を記述するので単階層のみを記した。

表の右側には、KURRA ウェブサイトの資料情報に関する項目名を記載した。これらは、(1) 名称を変更しなかった項目、(2) 名称を変更した項目、(3) 追加した項目、(4) 今後追加したい項目にわけられる。①から⑭は、リニューアル後の「アーカイブ資料」ページ内での掲載順を示す。

(1) は、①②④⑨である。これらは、DACs の定義を確認して、名称変更が不要と判断した。なお、今回の作業は、DACs との関係の明確化を目的としたため、英語名は積極的に変更したが、和訳は最小限の変更に留めた。

(2) は、③⑤⑥⑦⑧である。③⑥は英語名を変更したのみだが、ほかは記述内容に踏み込んで検討した。

⑤は、DACs の 8.1 のうち 8.1.5「Archivist and Date」を参照した。これまでは目録の公開年を記述してきたが、リンク先の「京都大学デジタルアーカイブシステム」（以下 Peek）にあわせて作成年として、日英の項目名も変更した。これで、目録の改訂情報も記述可能となった。アーキビスト名は、国際アーカイブズ会議（ICA）による記述標準 ISAD(G) でも「アーキビスト・ノート」として第二版で追加された要素である *⁵。目録の作成には一定の中立性が求められるが、究極的には作成者の個性を完全になくすことは不可能である。そうした葛藤の帰結が、ISAD(G) 第二版の項目追加と考えられる。KURRA ウェブサイトには、現時点で目録作成者名の記載はないが（Peek にはある）、目録作成の背景や意図を知れる重要な項目なので、作成年と作成者とのどちらも意味するように「目録作成」とした。

⑦は、DACs の 6.2 を参照した。資料の複写物について、



図 1：新しくなった京都大学研究資源アーカイブのウェブサイト
（画像は「河合雅雄資料：霊長類学関係，1959-1975。」より）

表 1: DACS の項目 (左) と KURRA ウェブサイトの項目 (右) 凡例: ●必須, △任意 *赤字は変更項目名。[] 内は管理画面のみで表示される項目

DACS		KURRA ウェブサイト (「アーカイブ資料」ページ内の項目名)	
項目名	単階層	日 英 (旧)	日 英 (新)
1 記述レベル Levels of Description			
2 識別の要素 Identity Elements			
2.1 レファレンス・コード Reference Code	●		⑪ 資料番号 Reference Code
2.2 所蔵機関の名称と場所 Name and Location of Repository	●		⑫ 所蔵部局 Name and Location of Repository
2.3 タイトル Title	●	*項目名なし	① [タイトル] [Title]
2.4 日付 Date	●	資料年代 Date	④ 資料年代 Date
2.5 規模 Extent	●	数量 Volume	⑥ 数量 Extent
2.6 作成者名 Name of Creator(s)	●	出所・作成 Origin, Creator	③ 出所・作成 Name of Creator(s)
2.7 管理の履歴および経歴 Administrative/Biographical History	△		
3 内容と構造の要素 Content and Structure Elements			
3.1 範囲と内容 Scope and Content	●	*項目名なし	② [資料概要] [Scope and Content]
3.2 編成法 System of Arrangement	—		⑬ 資料編成 System of Arrangement
4 アクセスの要素 Conditions of Access and Use Elements			
4.1 アクセス条件 Conditions Governing Access	●	注意 Notice	⑧ 利用条件 Conditions of Access and Use
4.2 物理的アクセス Physical Access	—		
4.3 技術的アクセス Technical Access	—		
4.4 複製と利用の条件 Conditions Governing Reproduction and Use	—		
4.5 言語と文字 Languages and Scripts of the Material	●		⑭ 言語と文字 Languages and Scripts of the Material
4.6 検索手段 Finding Aids	—	*項目名なし	⑨ 検索手段 (Peek) Finding Aids (Peek)
5 収集と評価選別の要素 Acquisition and Appraisal Elements			
5.1 保管の履歴 Custodial History	—		
5.2 直近の取得元 Immediate Source of Acquisition	—		
5.3 評価選別、廃棄、保存年限の情報 Appraisal, Destruction, and Scheduling Information	—		
5.4 追加取得 Accruals	—		
6 関連資料の要素 Related Materials Elements			
6.1 原本の有無と所在 Existence and Location of Originals	—		
6.2 複写物の有無と所在 Existence and Location of Copies	—	メタデータ Metadata	⑦ メタデータ Existence and Location of Copies
6.3 関連するアーカイブズ資料 Related Archival Materials	—		
6.4 出版情報 Publication Note	—		⑩ 利用実績 (Publication Note)
7 注記の要素 Notes Element			
7.1 注記 Notes	—		
8 記述管理の要素 Description Control Element			
8.1 記述管理 Description Control	—	公開年 Release Year	⑤ 目録作成 Archivist and Date

存否, 場所, 利用可否を記述する項目で, ウェブサイトでの複写物の公開も念頭に置いている。KURRA がデジタル化した資料の利用可能性等を記述することが定義に合うが, 資料を代替する Peek のメタデータ数にまずは用いた。

⑧は, DACS の 4.1 と 4.4 とを参照した。4.1 は「アクセス access」, 4.4 は「複製 reproduction と利用 use」についての制限事由である。4.1 と 4.4 との違いは日本語からはわかりにくい, 「アクセス後の, 複製, 出版, またはその他の利用 reproduction, publication, or other uses after access」と定めている。「京都大学研究資源アーカイブ特別利用規則」における「資料等の特別利用」とは, 複製と「(2) 撮影」「(3) 複写」「(4) 複製」, 利用と「(1) 閲覧」「(5) 掲載」「(6) 放映」「(7) 貸出」「(8) 展示」「(9) 上映」「(10) 二次利用」とが対応する。つまり KURRA では, 複製と利用とを「特別利用」に一括している。そしてアクセスを学内に限定する場合もある。そのため英語の項目は, 4.1 と 4.4 をまとめて access and use として, 資料の所有部局等が課す条件をここに示すことにした。「特別利用」については, 利用方法で詳しく説明したので, ここから利用方法のページへ誘導してもよい。

(3) は, ⑩であり, DACS の 6.4 を参照した。資料の利用, 研究, 分析に関する出版情報を記述する項目で, 類似の情報でも, 4.6 の目録, 6.2 の複写物とは区別する。DACS の事例では過去の出版を挙げているが, KURRA では将来の利用のためにこの項目を使うことにして, 新設した利用実績と関係づけた。そのためアーカイブ資料のページは, 利用実績と他の項目とを一望できるレイアウトとした (英語版は利用実績を作成しない予定のため, 表 1 では括弧に入れた)。

今後の予定—アーカイブズらしさの周知へ

⑪⑫⑬⑭は, (4) にあたる。資料利用 (とくに出版) の際, 資料番号の省略や誤記が少なくない。資料番号の重要性を周知する意味でも, ⑪は資料概要に含めたい。また⑫で現物資料の所有者を記述すれば, 大学全体の活動であることを明示できる。⑬の編成も, アーカイブズらしい項目なので追加したい。現在リニューアル後の内容にあわせた英語版も作成中である。その場合は⑭が有益と考えられる。

(総合博物館 特定助教 齋藤 歩)

* 1: 京都大学研究資源アーカイブ, URL: <https://www.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/>, (accessed 2020-07-14)

* 2: 最新版は Version 2019.0.3. Describing Archives: A Content Standard, Society of American Archivists, URL: <https://saa-ts-dacs.github.io/>, (accessed 2020-07-14)

* 3: 2017 年までは MARC と EAD との利用を推奨している。2021 年度でも同様の成果を課しているが, 方法の指定はない。Access to Historical Records, FY 2017 Grant Announcement, National Historical Publications and Records Commission (NHPRC), URL: <https://www.archives.gov/nhprc/announcement/access.html>, (accessed 2020-07-14)

* 4: EAD (Encoded Archival Description) と MARC (Machine-Readable Cataloging) とは, 資料の構造 (structure) に関する記述標準。

* 5: 森本祥子「アーカイブズの編成と記述標準化—国際的動向を中心に」, 『アーカイブズの科学』下巻, 柏書房, 2003 年, 248 頁。

新任スタッフの紹介

延寿里美 資料開発系・特定助教

4月1日着任

4月より特定助教として着任いたしました、延寿と申します。化石や地質試料を含む地学系全般の標本を担当していますが、特に鉱物学を専門としています。地球科学は天文学、気象学、地質学、古生物学など、私たちの暮らしている地球や宇宙のシステムについて研究を行うある意味とても身近な学問です。現実には起こっている現象を解明するため、物理や化学、生物などの分野を複合的に用いて研究を行います。

鉱物は地球の大部分を構成していて、私たちの見ることのできない地下深くや、宇宙における遠い昔の出来事について情報をもたらしてくれます。私はこれまで蛇紋石をはじめとする熱水との反応から形成される鉱物の記載をメインとして研究に取り組んできました。実際に自分で野外調査にて試料を採取し、組織や化学組成、結晶構造などを分析することで地球の内部においてその鉱物がどこでどのようにして形成されてきたのかを明らかに

してきました。

鉱物や化石などの地質標本は非常に長い時間をかけて地球が作り出したものであり、昔採取されたものの中には今では手に入れることが困難なものも多く存在します。京都大学には三高時代や帝国大学時代から受け継がれる貴重な標本が収蔵されています。これらの標本を研究や教育に活用するためにもしっかりと整理や管理を行い、未来へとつなげていきたいと考えています。また、標本を見るだけではなくその魅力や背景についても皆さんに感じていただけるように、展示やアウトリーチ活動など精一杯取り組んでいきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。



総合博物館日誌 (2020年3月～6月)

展示

★ 2019 年度特別展

「文化財発掘VI - 幕末・近代の出土文字資料 -」

2020年2月19日(水)～2020年4月19日(日)

※ 2020年2月29日～4月19日：新型コロナウイルス感染拡大防止対策のため臨時休館

イベント

・第24回 京都ミュージアムロードクイズラリー

期間：1月22日(水)～3月22日(日)

※ 2020年2月29日～3月22日：新型コロナウイルス感染拡大防止対策のため臨時休館

レクチャーシリーズ

該当なし

総合博物館セミナー

該当なし

展示協力 (学術標本資料の貸出)

・向日市文化資料館 (2点) 令和元年度企画展「戦国時代の物集女と乙訓・西岡」

会期：2月29日(土)～3月29日(日)

・京都文化博物館 (2点) 2020年度京都文化博物館総合展示「明智光秀と戦国京都」

会期：6月20日(土)～8月16日(日)

・大阪市立自然史博物館 (2点) 第50回特別展「知るからはじめる外来生物～未来へつなぐ地域の自然～」

会期：6月9日(火)～8月30日(日)

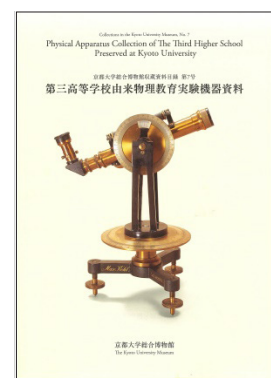
入館者数

0名

※ 2020年2月29日～6月30日：新型コロナウイルス感染拡大防止対策のため臨時休館

博物館の刊行物

京都大学総合博物館収蔵資料目録第7号
第三高等学校由来物理教育実験機器資料



発行日 2020年9月28日
編集・発行 京都大学総合博物館 電話 075-753-3272
〒606-8501 京都市左京区吉田本町 FAX 075-753-3277
<http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/>